

3月15日(日)

辛口

昔ながらの味わい

銀鮭

1パック(4切入)

1,000(税込)円

 西田鮮魚店

72-5246

御用聞き便専用番号 090-7125-5489 (旧庄原市内はご自宅に配達)

西田鮮魚店 副店長

久々入荷の辛口鮭。昔ながらの味わいが魅力な塩鮭です。
我が家は前から、グリルで魚を焼くと家中が真つ暗に(笑)。焼くと電気が落ちる。漏電?!と思い、グリルを使うのを諦めました。
そこで今回、試食してみようと、フライパンで挑戦。表面に焼き色をつけ、後は蒸し焼きに。脂でチリチリ言いながら、焼けた!!しかも抜群な焼き加減。やれば、できる!(笑)
娘に、「この鮭辛いよー」と言うのと、「辛い?塩強つ!!」思い通りのコメント!!そうです、辛口ですから(笑)。しつかりとした塩加減が、鮭の旨みをしっかりと引き立て、身はふっくら。ご飯との相性抜群。1切れで...いや、1欠片でご飯1杯はいけます!!その後2杯目、お茶漬け。色々楽しめます。是非この機会にご来店

『小さな町の小さな本屋さん』

鮮コーポレーション(株) 代表取締役会長 西田 昌史



I ネットフリックスで楽しむ土曜の昼下がり

土曜の昼下がり、悦子は朝から広島の長男のところへ。朝からひとりの私は、ネットフリックスで『マネーショート』という映画を見ていた。あの2008年の『リーマン・ショック』の顛末を描いた映画。人間関係や金融の理屈がややこしい。

『サブプライムローン』という用語を久しぶりに思い出した。頭のいいウォール街のエリートたちが考え出した地獄へつながる仕組みだ。しかし、どうも、理屈がわからない。「ん？どういうこと」

「そりゃ、いけんじゃろ」「あほちゃうか！」

主人公たちは、サブプライムローンは『ねずみ講』みたいなもので、必ず破綻すると確信している。だからエリートたちの逆を行く。そして…。という話なのだが、この手の話が結構好きだ。

いよいよ佳境に入り、それまで勝ち誇っていた人たちが窮地に陥る。さあ形勢逆転だ、と思ったそのときドアが開く音がして悦子が入ってきた。手には大きな買い物袋が。重たそ。キッチンのカウンターに「よいしょ」とのせる。

II もうちょっと 10分で終わる

来週、三女が孫2人と2週間ほど帰ってくる。悦子は長男に会うついでに、五日市の『ミートファクトリー』で肉を買ってくると言っていた。孫は2才と1才で3人の食べる量は知れているのだが、三女たちが来ると、永末に住む長女一家も、頻繁に顔を出してくれ食事を一緒にすることが増える。こちらの孫はこの新学期で、中一、小5、小2になる。けっこう食べる。いきなり大家族だ。

そういうわけで、大量の肉を仕入れてきた。買い物袋をキッチンに置くと、テレビを見る私の横にすわり、ひと息。

「おかえり」と言ったままテレビから目を離そうとしない私に、仕方なく悦子も画面を見ていたが、途中から見て面白いわけない。少しして話しかけてきた。

「早晴がね、」長男の娘の名前をあげて続ける。私は生返事。ストーリーはますます、ややこしくなっている。話に付き合ってるひまはない。思わず言ってしまった。「ちょっと、黙っといてくれる」広島を往復して帰って、ほっと一息入れて旦那に話しかけたら、この仕打ち。「むっ」としたのがわかったが、しかたない。もうちょっと、10分くらいで終わる。それまで…。

III 「どこ行くん？」「ほなび」

2〜3分たったろうか、車の止まる気配がしてドアが開き、長女と、3月の今はまだ小4の孫が入ってきた。孫はまっすぐ私のところに来て、話しかける。まずい。娘はともかく、孫は放つとくわけにはいかない。一瞬まよったが、テレビを一時停止。ネットフリックスだから止めてもかまわない。そうして、孫と二言三言。孫にはテレビを一時停止させる力がある。

10分もいたろうか。孫が言う。

孫「ママ、早く行こ」

私「どこ行くん？」

孫「ほなび」

私「ほなび？」

孫「うん、本」

私「へえ、本か」

何の本かは聞かなかった。漫画ではなさそうだ。あの気配では小説だろう。真子が小説を買う？あのサッカー少女の真子が…。爺じというのは孫のことならなんでもうれしいものらしい。

IV 本屋さんが好き

こどものころ、本屋さんが好きだった。私の記憶にある庄原の本屋さんは日赤の前の『森盛文堂』、本通りの『小池書店』、中央通りの『白部書店』。森盛文堂は小学校のころ無くなったから、あまり覚えてない。

こども時代の私にとっての本屋は小池書店だった。

入り口の正面の平台には雑誌が並べられていた。その奥にレジが置かれ、いつもふくよかなおばあさんが座っておられた。さらに奥には文房具の売り場があったが、奥まっていたせいだろうか、どことなく高級そうで、文房具は『武村』で買っていた。

小学生の私の小池でのお気に入り、向かって左側の壁面、天井まであろうかという書棚の前に立って本を見上げることだった。あきなかった。今でも夢に出てくる。そして、わくわくしている。夢の中で。

小池はもの心ついたときにはすでにあったが、白部はいつからあったんだろう。中央通りが広くなってから？

高校時代、平凡パンチやプレイボーイは白部で買っていた覚えがあるから、中学のころにはもうあったのだろうか。それにしても、どきどきしながらレジに持っていくときの恥ずかしさよ。

高校生になって、野球に挫折した私は文学青年に変身した。汽車の中でも、休憩中も、家に帰っても暇があれば読んだ。母は、本を買うと言えばお金をくれた。当時は知らなかったのだが、母も文学少女だったみたいだ。

高校を出て、魚屋で仕事をするようになって、ほぼ毎日、仕事が終わって顔を出した。白部に行くのが日課になった。

店の真ん中へんに文庫本の棚が2つ。三島も太宰もここで出会った。ただ、本を眺めるのが幸せな時間だった。友達がみんな都会に出て、ひとり取り残された19歳。夜の過ごし方がわからなかった。

20才をいくつか越えて酒を覚えた。『十二会』という酒豪の先輩たちの会に入れてもらって私の文学青年時代は幕を閉じた。酔っているのは本は読めない。酒はこの人たちに教えてもらった。

しかし、まちがいに私を形づくってくれたのは『本』であり本屋さんだ。言いかえれば『小池書店』であり『白部書店』だ。

V 小池書店とほなび

真子が『ほなび』に行くと行ったとき、なんだろう。なんか心にぽっと灯りがともったような感覚を覚えた。『小池書店』と『ほなび』がかさなった。

大人になって巨大な本屋さんを利用するようになった。ネットで買うことも覚えた。でも、あのころ小さな本屋さんで、本を手にしたときのほっこりした感触は忘れられない。

長女たちが帰ってネットフリックスのスイッチを入れた。

悦子はもうキッチンに立っていた。

追伸

真子が買った本は『変な家』という題。

雨穴（うけつ）という変なペンネームのウェブライターによるウェブメディア記事、YouTube動画、その動画と連動した不動産ミステリー小説と紹介してありました。

よくわかりません。昭和の本屋さんで育った私には。

